

**解 答**

a 貯蔵	b 規則	c 演奏	d 採集
------	------	------	------

- 一 煙はあれ果  
二 父親が借金を残して死んだので、学資が払えず大学を中退し、生活のためにと母親から頼まれて、試験を受けて薬屋を継いだため。
- 三 ふだん暮らす孤児院での生活は分単位で行動が決められているが、祖母の家で、その時間の制約から突然解き放たれて、落ち着かず、とまどいを感じたから。
- 四 しみじみとして優しいなかのさまざまな音
- 五 ご飯をおかわりしたいが、盛り切りが規則である孤児院流が身についているため、仕方なくがまんしていること。
- 六 潣戸物の食器で食事をする点
- 七 こはんのおかわりができる点
- 八 蚊やりや蚊帳の匂いのする点
- 九 孤児院でなく、祖母の家を今後の生活の場にしたいという意味。
- 十 泊まりに来たことを叔父は快く思っていないらしいえ、借金もあって経済的に楽ではない様子がうかがえたので、子ども二人を置くのは難しそうだと思ったから。
- 十一 相手の立場を思いやって自らが身を引くことができるひとがら。
- 一二 1 祖母から、「ぼく」たち兄弟が長男の子どもとして家をつぐべきなのだから、大いばりでいてよいと言われ、勇気を得たから。  
2 孤児院の習慣や流儀が身に染みついていて、祖母の家でも心から落ち着くことができずにいる。
- 十三 1 孤児院を出て、家庭のあたかみのある祖母のもとで暮らしたいと願ったが失敗に終わった自分たちと同様、普段の生活の場である山の松林から降りてきた結果、危うく捕まえられそうになっている蟬。その蟬を見逃してやることで、自分たち同様に苦しい立場に置かれているものを助けてやろうという、兄弟の思いやりの心を印象づける意味がある。
- 二 かつて「すっきりした姿で立っていた」（3行目）赤松は、三年後の今、「いやに雑然として」（一行目）、「りりしさ（きりりとひきしまったさま）に欠けてい」ます。祖父の死後、金銭的にも精神的にもゆとりがなくなった『祖母』の家の今の状態は、畠が「あれ果て」、雑草の「ばびこる」様子（27行目）にも表れています。
- 三 「本文を最後まで読んでから」と設問文にありますから、伯父が「大学は二年でやめた」（21行目）理由が読み取れ、130～151行目の「叔父」の会話に注目します。「親父が借金を残して死んだから学資が送れない、というから学校を中途でよして……へもどってきた」（30・131行目）「叔父」は、「店をついでくれないと食べては行かれないと薬

**解 説**

2010年に亡くなつた井上ひさしの自伝的小説、「あくる朝の蟬」（『四十一番目の少年』所収）からの出題です。戦後もない頃、父が死に、母と離れて孤児院で暮らす兄弟が、祖母の招きで帰省します。祖母は、孫たちを大切に思いい、世話を焼いてくれますが、「叔父」は違います。家業が傾いたせいで、大学の中退を余儀なくされて鬱屈した毎日を送っています。また、父親の葬式にも出なかつた義姉（＝主人公たちの母）を冷血な女だといまだに憎んでいます。兄弟は、孤児院を出て「家庭の匂い」のする祖母の家に同居する希望をいつたんは抱きますが、「叔父」の拒絶にあり、祖母に遠慮したすえに、翌朝早く置き手紙を残して家を出て、再び孤児院へもどります。

読みどころは、兄である「ぼく」の心情の移り変わりですが、「叔父」の鬱屈、祖母の孫たちへの愛情と「叔父」への遠慮、また孤児院暮らしをしてきた幼い弟の妙に冷めた認識など、周りの人物たちの性格・心情も正確に読み取りましょう。さらに祖母の家の経済的な苦しさを「雑然とした赤松」の姿で表したり、祖母の家で暮らせるという「ぼく」の希望を「螢の光」で象徴したりするなどの巧みな描写にも気をつけます。

んがたのむから試験を受けて店もついた。借金をどうにかしておくれと母さんが泣きつくから必死で働いている」(32・133行目)のです。思い通りに生きられない「叔父」の不満が「はき捨てるような口調」(21行目)に表されています。

四 祖母の家で「夕餉ができあがる」(59行目)まで、「ぼく」はすべきこともなく、縁側に腰を下ろします。すると、「孤児院の日課」に縛られていたときには聞こえてこなかつた、自然の奏でる音、生活の音が耳に入ります。祖母の家で一時、のびのびと安らいた気分で居る「ぼく」は、それらを「しみじみとして優しいいなかのさまざまな音」(55・56行目)と感じています。

五 「しみじみとして優しいいなかのさまざまな音」(55・56行目→四)に囲まれながらも、「かえっていらしゃる」(56行目)理由を、直後で、「生まれたときには聞こえてこなかつた、自然の奏でる音、生活の音が耳に入ります。祖母の家で一時、のびのびと安らいた気分で居る「ぼく」は、それらを「しみじみとして優しいいなかのさまざまな音」(55・56行目)と感じています。

六 「おひつを横目でにらみながら」には、まだおひつに残っているご飯への未練が表れています。本当はまだご飯を食べたいので、「……こちそうさま」(77行目)というのも「小声」(81・82行目)になつてしまつたのです。「茶わんの持ち方」(68行目)など、一連の弟の様子から、「弟は孤児院のたがを外せないで困つていて」(56・58行目)からだと言っています。設問文に「自分の言葉で」とありますから、比喩表現を、自分の言葉で簡潔に言い換えて説明します。「時間のおり」とは、孤児院の分単位での日課をたとえています。

## 七

### 八

「傍線部を含む、「蚊帳の匂い」は孤児院にない匂いだ、これが家庭の匂いだつたら思つたときから、夕方以来の妙にいらついていた気分が消えうせて」(85・87行目)から、結局、「ぼく」も「時間のたがははずれたので面くらつた」(79行目→五)だけでなく、弟と同じように「孤児院のたがを外せない」(79行目→六)で、「家庭」と「孤児院」とのちがいにとまどい、いらついていたのだと考えられます。ここでは、「家庭の匂い」を感じさせるもの、つまり、「孤児院」にはないものを挙げます。まず、傍線部直前の「これ」で示された、「蚊帳の匂い」。そして、「孤児院流」(70行目)が染みついた弟と、「家庭の匂い」しか知らない祖母との意識のちがいが露わになつた、ご飯のおかわり(78・84行目→六)、瀬戸物の食器(68・76行目)などが挙げられます。

九 「蚊帳の匂い」に「家庭」を感じ、「おさまるべきところへ気持ちが無事におさまつたという感じがした」(85・87行目→七)「ぼく」。慣れた「孤児院」と慣れない「家庭」とのちがいに「いらついていた」(86行目)ことに気づき、「座敷を自分の部屋らしく」することと、早く「家庭」の雰囲気に慣れて落ち着きたいと考えたのでしょうか。

十 (1) 「赤松が見えた／ぼくは軽い狼狽を覚えた」(一行め)と、130行目以降の祖母と「叔父」の会話を聞くまでもなく、家の外観だけで、すでに「ぼく」は、祖母の家の経済的困窮をおぼろげに感じています(→二)。さらに、店に入り、「叔父」の冷たい態度に、歓待されいないことを察します(9・25行目)。とても、家に置いて欲しいなどとは言い出せない雰囲気を感じていたのです。

(2) そうは言つても、孤児院は「ほかに行くあでが少しだもあつたら一秒でも我慢できるようなどころでもない」(115行目)のですから、「家庭の匂い」(86行目)に触れて、祖母の家で暮らしたいという思いはふくらんでいきます(→四・八)。そこへ、祖母から「おまえたちはわたしの長男の子どもたちだもの、本当ならおまえがこの家をつぐべきなのだよ。大いぱりでいいよ」(103行目)と言われ、「勇気がつい」(104行目)たのです。

十一 家の借金と薬屋という家業とで、経済的にも精神的にも余裕のない「叔父」は、孫たちを引き取りたいという祖母のたのみに耳も貸さず、さらに、思うとおりにならない不満をぶつけます。憤る「叔父」に対し、「子ども二人ぐらいく」(39行目)、「もう長い間とはいわない」(142行目)、「おまえのおいだらう」(148行目)と、祖母も必死に食い下がります。祖母の、自分たちに対する愛情と、「叔父」との暮らしへの肩身の狭さを、聞こえてくる祖母と

「叔父」とのやりとり（128～152行目）から、兄弟は知ります。孫と息子との間で板挟みになる祖母のつらい立場を思い、自分たちが「孤児院にもどった方がいい」（155行目）と、孤児院に帰ることを決めます。

十二 先行する各問い合わせ参考にしながら、「ぼく」たちの心情を三つに区切り、まとめます。  
①孤児院の生活感覚から抜け出せず、「家庭の匂い」とちがいにとまどい、落ち着かない。（1～83行目↑四、五、六）  
②時が経つにつれ、「家庭の匂い」になじんで落ち着き、祖母の家に置いてもらえるという希望を感じる。（84～126行目↑七、八、十）  
③「叔父」の怒りと、同居に期待を寄せる孫との間で板挟みになる祖母のつらい立場を知り、孤児院に帰ることを決める。（128行目～問十一）

十三 (1) 「孤児院流」（70行目）が染みついた「ぼく」へ、「家庭の匂い」（86行目）に気づかせたのが「蚊帳」でした（→七）。その「蚊帳」にとまり、「小さな光」を発する螢は、しかし、「叔父」の剣幕に「おどろいてにげだし」（158行目）でしまいます。孤児院を出て、祖母のもと、「家庭の匂い」に包まれて暮らすという希望（↑八）が、「叔父」の怒りによってついえた（↑十一、十二）ことになぞらえて考えることができるでしょう。  
(2) 「螢」と同様に、「エゾ蟬」についての描写をとらえ、どんなことを暗示・象徴しているか、考えます。「たいてい山の松林にいる」のが「めずらしく降りてきた」（186行目）「エゾ蟬」が「大きな声で」「鳴いてい」（173行目）ます。「昆虫をつかまえるのが好きな」（51行目）弟に対し、「ぼく」は、「いきなり大声を出すとびっくりして飛び出す」地面に衝突して」（181行目）、「気絶するところをつかまえる」（183行目）と、つかまえ方を教えます。大声を出して「つかまえちゃおう」（188行目）とする弟をたしなめ、「ぼく」は「見のがしてやろう」（193行目）といいます。その「エゾ蟬の鳴き声にせきたてられるように」（194・195行目）して、兄弟は祖母宅を後にします。

「ぼく」は、めずらしく場違いなところにいる「エゾ蟬」に、慣れた孤児院を出て祖母の家にやってきて、「叔父」の憤りに、祖母と暮らす希望をなくし、孤児院にもどる自分たちの立場（↑五、六、七）と重ねてみているのかもしれません。「エゾ蟬」に同情慈悲を垂れて、また、「ぼくたちをここへ置いてください」（107行目）と自分から言い出しさえしなければ、もう少し長く、祖母のもとにいられたかもしません。自分の言葉によって、祖母の家から「せき立てられる」（194行目）ような結果になってしまいました。